The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	1920－1940年代の満洲におけるロシア人と日本人の「満洲経験」に関する思い出 : 1920－1940年代の満洲において居住したロシア人と日本人の回想記の比較研究
Author(s)	ヤキメンコ, レギーナ
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67062
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　ヤキメンコ　レギーナ　）	
論文題名	1920－1940年代の満洲におけるロシア人と日本人の「満洲経験」に関する思い出 ―1920－1940年代の満洲において居住したロシア人と日本人の回想記の比較研究―

論文内容の要旨

本研究では、1920－1940年代の満洲に存在していたロシア系ディアスポラと日系ディアスポラにおける日常生活（「衣食住」の問題）、そして、ディアスポラの一員の精神的状態、心理的防衛方法を検討してきた。一つの領土において、隣人として共生していたロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの「満洲」の経験について、対照分析を行うことが、本研究の目的であった。

本研究のキーワードは、①「ディアスポラ」、②「日常性」、③「回想記」、そして、④「満洲」である。

①「デイアスポラ」とは、様々な学問分野で扱われているテーマであるため、その定義を巡る議論が続いている。しかし、20世紀後半から、「ディアスポラ」の研究への関心が更に高まり、その言葉の意味も拡大してきた。

②本研究の対象は、ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの一員である一般人の日常生活である。

「日常性」とは、個人にとって、最も身近で、実に重要な現実性であるということである。各個人にとっては、周囲の現実的世界だけが存在しており、個人は、自ら影響させられる、自分の努力により変化させられる世界範囲だけに対し、本当の関心を示している。

「日常性」とは、物質的な意味を超え、個人の思想、様々な出来事に関する態度などを含む、個人の精神性でもある。

本研究では、次のような問題点を分析してきた。

「仕事」を検討する際、イミグレーション環境への適応能力、アイデンティティの形成の過程、などのような問題点に注目した。イミグレーションの状況下において、「迷った人」は、ロシアと日本人の中にも存在していたが、その人がどのような運命に出会っていたのかについても、明らかにした。

なお、満州国の時代における、「支配者」日本人と「被支配者」ロシア人の労働状況に関して、対照分析を行ってきた。終戦後の満洲における労働状況の特徴にもついても、記述してきた。

「住宅」を検討する際、ロシア人と日本人の生活様式、生活状況が住宅の様子や、インテリアにどのように影響されていたか、について検討し、また、ホスピタリティ、贅沢などに関しても、ロシア人と日本人の視点を比較した。

「着衣」を検討する際、ハルビン特有の「おしゃれ」文化が、ロシア人と日本人に、どのような影響を与えていたのか、「ドレス・コード」とは、ロシア人と日本人の人生において、どのような意味を持っていたのか、などについて考察し、「着衣」を通じて、貧富の差、という問題をも分析してきた。

「食事」を検討する際、「外食」の文化を、当時の満洲に存在していた民族間のコミュニケーションの手段としても、扱った。そして、第二次世界大戦の時期、終戦後の時期を検討する際、飢餓との闘いに関し、ロシア人と日本人の経験に注目した。

そして、ロシア人と日本人の移民者の精神状態についても考察した。

移民生活者の心理的問題においては、民族性、文化的属性などにも関わらず、共通点が存在している。しかし、その状態の理由として、様々な出来事が登場する。

本研究では、ロシア人と日本人の精神状態へ特に大きな影響を及ぼしたファクタに関する対照分

析を試みた。ロシア人と日本人の回想記の分析を通じては、「自分の世界が崩壊した」という個人的悲壮感、アイデンティティを失うこと、孤独、親子の対立などの問題に関し、対照分析を試みた。

精神的なトラウマから、自己を守ること、精神的支えを探すことは、本能的な行為でもある。しかし、様々な問題に対し、特別の態度を取ることは、文化、育成の仕方、宗教などによっても、影響されている。ロシア人と日本人により適用された、精神的なトラブルを処理する方法に関しても、対照分析を行ってきた。

感情を表すことに関する、ロシア人と日本人の見方における相違を明らかにし、精神的な支えとしての宗教の意義に関し、ロシア人と日本人の視点を比較してきた。団結性維持の重要性、自分の子供に注目を向けることなどをも、精神を支える方法として見ることができる。その際にも、ロシア人と日本人の経験に関し、対照分析を試みた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（　ヤキメンコ・レギナ　）		
論文審査担当者	（職）	氏　　名
主 査	教授	ディボフフスキー　アレクサンドル
副 査	教 授	伊勢　芳夫
副 査	准教授	ヨコタ村上　孝之

論文審査の結果の要旨

R.ヤキメンコ氏の論文『1920－1940年代の満洲におけるロシア人と日本人の「満洲経験」に関する思い出 ―1920-1940年代の満洲において居住したロシア人と日本人の回想記の比較研究―』では、当時の在満ロシア系ディアスポラと日系ディアスポラの日常性及びディアスポラ・メンバーの精神状態に関わる諸問題が考察されている。本論文は、大阪大学大学院言語文化研究科の論文らしく、学際的なものであり、歴史、文献学、エスノグラフィー、社会学、心理学などの手法を使用している。当時の満洲に関する回想記についての先行研究では、ロシア系ディアスポラのみ、或いは日本系ディアスポラのみを研究対象にする傾向がみられるが、R.ヤキメンコ氏は、ロシア系ディアスポラに関する回想記３２点及び日本系ディアスポラに関する回想記２６点を考察し、その対照分析を行った。

本論文は、序論（第１章）、第１部（第２～４章）、第２部（第５～７章）及び結論で構成されている。序論では、「ディアスポラ」、「日常性」、「回想記」など、本研究の基本概念が導入、先行研究が概観され、研究目的及び研究方法が論じられている。第１部「日常性」では、両ディアスポラ・メンバーの衣食住の問題を始め、就職、教育、娯楽などの問題が考察され、第２部「精神的状態、心理的防衛方法」では、両ディアスポラ生活の精神的側面が分析の対象となっている。

第２章で、本論文の著者は、ロシア系ディアスポラの日常性を検討し、白系ロシア人と赤系ロシア人の仕事やレジャー、ロシア系ディアスポラの各社会層の住宅条件、食生活や服装などに着目し、イミグレーション後の環境適応やアイデンティティ形成の問題にも言及し、第３章では、同様の視座で、日系ディアスポラの在りようを考察した。第４章では、当地域における政治支配の交代を背景に、両ディアスポラの在り方の対照分析を行い、ロシア人と日本人の生活様式、住宅の様子やインテリア、文化交流の形態、住宅条件や食生活、両ディアスポラのホスピタリティ文化、「贅沢」の意識や家庭における男女の役割などに対するロシア人と日本人の視点を比較し、ハルビン特有の「おしゃれ」文化、ロシア人と日本人の人生における「ドレス・コード」の意義、当時の満洲における民族間のコミュニケーションの手段としての「外食」文化などを考察した。

第２部では、両ディアスポラ・メンバーの精神状態が本研究の焦点になっている。 まず、第５章と第６章では、両ディアスポラに関する精神面のデータが別々に検討され、その後、第７章で、異文化環境及び政治状況急変による不安感や孤独感、自尊心の傷つき、アイデンティティ拡散、心理的双対性などパーソナリティ問題及びそれを呼び起こした要因､精神問題対応方法の対照分析が実施された。民族性の相違にもかかわらず、両ディアスポラ・メンバーの精神状態において多くの共通点が見いだされ、窮境に見舞われたロシア人と日本人の心理的防衛における相違も究明することができた。

本論文には、母語話者チェック不足による日本語使用における若干の不備、漢字変換ミスやミスプリがあるものの、博士（言語文化学）の学位論文として十分価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添える。